サムライ日本ショー

ジョー岡田が見た戦後

・9

鵜飼 正樹

一九四六（昭和二十一）年三月、旧制三田中学を四年で卒業したジョー岡田は、その後、いくつもの仕事を転々とする。敗戦直後の混乱期、食糧難とインフレの時代であった。

「必死に仕事を探しました。手軽にあるのが道路工夫、それから神戸港の沖仲仕」

たとえば神戸港での沖仲仕の仕事は、こんなふうだった。

「貨物船に乗るやろ。夜中じゅう働くの。何をやるかっちゅうと、船底にいっぱいある小麦をスコップでモッコに入れるわけや。それをクレーン車でギューッと上げてね、トラックか何かに入れるわけや」

「出る弁当がねえ、その小麦を蒸したやつやねん。玄米ならまだましでっせ。小麦のメシいうたら、パラパラの、ポリポリの、どないもならんけどね。まあそれでも食いました」

生きんがために働いた。働かなければ、生きてゆけなかった。そんな日々のなかにあった、のちのジョー岡田を予感させるようなエピソードを紹介しておこう。

「ある晩、デッキに上がったらね、かわいい、小学生ぐらいのブロンドの女の子がおって、ニコッと笑ってね、『ハロー』っていうわけよ。で、おれは（中学で）かじった英語があるからね、多少はできるんで、チョッチョッチョッと話してね。それが、おれの、生まれて初めて外人としゃべった英語や」

これをきっかけに、少女とジョー岡田の間にロマンスが芽生えた……、というわけではない。たった一度、ことばを交わしただけで終わったのだが、失敗を恐れずに、自分から英語で話しかけるという積極性は、いかにもジョー岡田らしい。

生まれて初めての英語

ジョー岡田が働いたと思われる1950年代の「イタミ・エア・ベース」（荒西完治さん提供）

失敗を恐れない積極性 発揮

三木市で名産のかまを仕入れ、父親と一緒に、中国地方や九州まで、かついで売って回ったこともあった。当時は地方の農家のほうが暮らし向きもよかったので、よく売れたようだ。

伊丹にあった進駐軍のキャンプでも、半年以上働いた。進駐軍に接収されていたイタミ・エア・ベース、現在の大阪国際空港に関連した施設だったと思われる。

バーテン、レストランボーイ、靴みがき、ベッドメイキング、パン焼き、犬の散歩など、いわれたことは何でもやる、雑役のような仕事だったが、楽しかった。通訳をしていた日系の女性にも気に入られて、何かというと「岡田、岡田」と目をかけてもらったらしい。

「セイラーっていう名前のシェパードがおって、隊長がかわいがってて、足をけがしたんや。通訳の女の子にいいに行ったの。『セイラー・ハーツ・ヒズ・レッグ』、いうたら、彼女が『えっ？』て聞くわけや。『ハート（heart）は岡田さん、心臓のことやで。足を痛めたいうたら、hurt』。ああなるほど、なんて思ったね。発音がちごたら、英語は通じない」

敗戦直後の進駐軍キャンプという場で、生きた英語に接し、ジョー岡田は観光ガイドへの一歩を踏み出したのである。

（京都文教大准教授）